



2005 11・25

事務局

岡谷市長地片間町 2-5-5

TEL, FAX 0266-28-9230

ニュース No. 7

### 会員がふえています

会員がじわじわと増えています。お一人お一人の努力に敬意を表します。ありがたいことです。署名とともに、会員をふやすこと、会員になっていただくように説得することが、まず手近でできる活動の第一歩ではないでしょうか。きびしい状況が続いています、今こそ立ちあがって行動にうつすときです。子供たちの未来のために、まず一步を踏みだしてください。

### 活動・行事の報告

#### 11月5日〔土〕第3回活動日 映画「日本国憲法」上映

参加者きわめて少数 だが映画は何回見てもすばらしい  
希望者には貸し出しをしますので(DVD)申し込んでください。

●茅野市の「戦争はいやの会」の代表者竹村みゆきさんは、からだが不自由で外へ出て署名など活動することができません。それで家の中でもできることをしようと、5人集まれば自宅で「日本国憲法」をビデオ上映しています。もう7~8回になるそうです。

#### 朝日新聞 11月1日付 「天声人語」より抜粋

(自民党の憲法)草案は、自衛隊を「自衛軍」とした。今の憲法には、軍の暴走によって泥沼の戦争になってしまったという思いがこめられている。戦後60年たったとはいえ、「軍」への改変に抵抗を覚える人は少なくないはずだ。

(在日米軍再編の)「中間報告」の方は、自衛隊と米軍との「融合」を打ち出した。米軍は究極のところは米国の国益のために存在している。もしも「軍」同士になって「融合」した場合には、米政府の戦略に今以上に左右されないか。

折しも米国では、チエイニー副大統領の首席補佐官・リビー氏が、イラクの大量破壊兵器(WMD)をめぐる情報に絡んで、偽証罪などで起訴された。補佐官は副大統領とともに「イラクがWMDを持っている」などと主張して、開戦を強硬に推進した。

パウエル国務長官が、開戦前の国連でWMDの存在について演説した際は、補佐官が中心になって報告を長官に提出した。結局WMDは見つからず、パウエル氏は今秋、この演説を「人生の汚点」だと述べた。ブッシュ政権にとっても大きな「汚点」だが、開戦をいち早く支持した小泉首相はどう受けとめたのだろうか。

内閣が改造された。小泉氏にとっては最後の内閣かもしれないが、日本や世界の歩みに、終わりはない。日米関係も重要だが、世界はさらに大きく、重いやみくもに、「軍」や「融合」の方に傾いてはなるまい。

## 11月16日(水)「諏訪九条の輪」発足のつどい

岡谷九条の会が当番幹事会となり、諏訪地方19の会が集まり、300人が参集。小森陽一先生の講演会も、切れ味よく明解で、1時間半がアツという間に過ぎてしまった。

[小森陽一先生のお話を聞いて] 国連憲章でも、武力攻撃や武力による威嚇は慎むように規定されているにもかかわらず、世界各地でアメリカの軍事介入が行われているのは、集団的自衛権が認められているからである。改憲されれば、イラク戦争に参加したイギリスと同じように、日米安保条約を結んでいる同盟国として、アメリカの世界戦略の片棒を担ぐことになる。憲法9条こそが、その抑止力であり、守り抜かねばならない。そのためには、身近な人から、一人一人輪を広げていくことが必要である。  
(代表委員 笠原忠夫)

### 今後の予定

## 12月3日(土)「憲法の疑問にこたえる学習講演会」

諏訪湖ハイツ 202号室 14:00~16:00  
講師 宮下与兵衛先生(伊那市民の会事務局長)

さそいあわ  
せてどうぞ

1月7日(土) 活動日 14:00~16:00 諏訪湖ハイツ  
2月4日(土) 活動日 14:00~16:00 諏訪湖ハイツ  
3月27日(月) 小森陽一講演会 (詳細未定)

### 世界6月号 憲法九条ができること—君島東彦・辻元清美対談—より抜粋

**君島** もともと憲法とは制限規範、つまり国家に対して「これをやってはいけませんよ」ということを定めて、権力を抑制するためのものです。だから「憲法があるためにできないこと」が出てくるのはあたりまえであって、9条でいえば、武力行使や海外派兵はしてはいけないことになります。

日本国憲法の平和主義については、前文と9条をセットで読む必要があります。憲法前文がいう「専制と隷従、圧迫と偏狭」「恐怖と欠乏」のない国際社会を作るために、私達は武力によらずに多様なことができるはずです。

**辻元** 「憲法9条があるためにできないこと」はただ一つで、それは戦争です。「戦争ができないのはいいことじゃないか」という原点に、もう一度立ち戻るべきだと私は思います。力で力を抑えようとするものの限界と矛盾が、いま噴出しているのではないのでしょうか。

米英を中心とする、イラクで武力行使をしている部隊は、いったい誰とたたかっているのでしょうか？いまや敵はイラクではないし、ビン・ラディンとたたかっているわけでもない。降伏させる相手すら定かではないような武力行使の時代に突入しています。力で立ち向かおうとするのは、暴力の連鎖と拡散を生むだけだということを目の当たりにしている。こういう混沌とした時代だからこそ、力に頼らない解決の道を探っていくといけません。